

# 南方（ビルマ）

## ビルマ戦記

新潟県 竹内 以知司

昭和十八年三月二十五日、召集令状が、新婚十八日目のわが家に飛び込んだ。

第一補充兵として新発田の歩兵第十六連隊に入隊、三か月の訓練を終え、軽機関銃手として六月二十六日「安藝丸（二万五千屯）」に乗船、マニラへ向け出港した。仙台第二師団はガタルカナルでやられたので、その補充に我々がゆくのだったんです。

マニラの兵站宿舎にはいって、びっくりした。眼の前に山のように積まれた白布で包んだ遺骨があった。「捧

げ銃」でおがんだがいつかは私もこのようになるんだなあーと覚悟しました。ガ島から生きて還った兵隊の姿は悲惨そのもので、骨に皮をかぶせた生ける屍とはこのような姿をいうのだろう。飢えの世界を生き延びたものだから、一升飯をドンと食べて、腹だけがブクッとふくれて、生きているのが精一杯の様子だった。体力の回復を待って私達と一緒に前線へ再び死出の旅にでるのです。

ガ島の生き残りはマニラからビルマへと転じ、生きて故国日本に帰してもらえなかった。軍の指導者はまげいくさの様子を内地の国民に知られたくないために、前線から前線へと死ぬまで追いやったのです。本当にむごいしうちと思いました。

マニラで二か月、昭南（今のシンガポール）で二か月訓練に明け暮れ、軍艦「青葉」に乗せられビルマに上陸、

一個大隊だけの島の警備にあたった。

歩哨に立っていた時、サソリに指を刺された。衛生兵が飛んできて刺された指を切開して毒血をしぼり出し手当をしてくれたので生命拾いした。ほうっておけば一口だそうです。

その後部隊は銀輪部隊となり、自転車で行軍したが案になったと思ったらトンデモない。パンクしたら置いてけぼりだ。パンク修理して追及するエラサ、大変だった。

ビルマで十六連隊(勇一三〇二部隊)は援蔣ルート遮断作戦(断作戦)に参加のため一九年八月バーモに到着。ただちに陣地構築にかかる。制空権は敵ににぎられていたので地上は何もない。すべて地下にはいる。毎日毎日防空壕づくり、六人がはいる壕をまずづくり、その連絡壕で陣地を形成するのだ。地上は英印支の連合軍が包囲している。

正面の敵は支那の新一軍だった。連日空襲と砲撃でやられ、その合間に日本語でスピーカーから流される降伏勧告が耳にはいつてくる。空から白や黄色のビラがまよいおちてくる。隊長の「ひろうな! みるな! よむな

!」。黄色のビラは「安全通行証」だ。降伏勧告はハッキリした日本語だから恐らく逃亡か捕虜になった日本兵に間違いない。

「忠勇なる兵隊は防空壕のなかにはいれ。おろかなる将校は壕のうえに立て」と呼び掛けている。我方は境好次大佐のひきいる一千三百人の精鋭だが、敵は四個師団の大軍で、十二月にはいると本格的攻勢にはいつてきた。白いビラをみるなといわれても、いやでも目にはいるからそうっと隠しみると、日本の傷ついた兵士が赤色の注射で殺される絵が書いてあった。青酸カリである。

ビラのせいか我が方の傷兵のなかから注射をきひする者が出始めた。黄色のビラがまかれてから夜間立哨中の兵隊が行方不明になる事件がひんぱつした。ら致されたのか、逃亡したのかわからなかった。

食事は日毎に乏しくなり、昼間は煙が出るので夜間壕のなかでたいだが、米と豆が半々の小さな握り飯が一食に一個だけだった。そのうちに栄養失調と脚氣が一緒になった「ザンゴウ病」と我々が称した病氣が流行しだした。

十九年十二月十四日の夜「寺の台に集合せよ」と集合命令がでた。原支隊長から「皆よくやってくれた。今日は赤穂義士討ち入りの日である。これから敵の包囲網を突破する。自分の力で突破せよ。他人に助けを求めてはならぬ」と訓示があり敵弾のなかを強行突破して近くの河畔に着いたが対岸からも撃たれ、進退きわまった。

川辺にカヤのやぶがあったので潜伏すること丸一日。やいんにまぎれてジャングルにはいり、樹のこずえの間を求めて行軍した。道のあるところのこずえは隙間があることを知った。

行軍の列は延びに延び、ついに患者部隊は遅れて、待たずとも追及せず、行方不明になってしまった。私も戦友宮越君と二人で歩いていったが、ついに歩けなくなったので携帯している手榴弾二個のうち、自決用の一個に手をかけたところを長沢軍曹にみつきり、ビンタで気合いを入れられ、ようやく歩き出した。

軍司令部でもパーモ救出のための救援部隊が急進していたのだから、途中で軍医中尉の手当を受けピタミン注射で元気がでてきて隊を追及した。隊では蛇を食べさせ

られ元氣回復できた。パーモの戦闘で原支隊に軍司令官から感状が授与された。

パーモを引き揚げてメイミョウにはいったが、二か月間の駐留中、対戦車攻撃の訓練で明け暮れた。オイン部落的の戦闘で英軍の戦車に包囲され、空から油をかけられ、火焰と砲弾で攻められ、第五中隊は損害続出で僅か二十六人になり、小隊の生き残りが五人というところも出た。軽機分隊長胸部貫通銃創で即死、弾薬手の一人は手榴弾で自決し、もう一人は頭部に負傷、私も腰部貫通銃創と足に擦過傷、手に破片創を受け動けなくなった。このままでは死ぬほかない。たき火の煙が一面にただよって敵からはさいわいかくれている。

川瀬小隊長が「竹内どうした」「竹内はもうダメであります」「生きられるだけ生きよう」と三角巾で手当をしてくれた。軽機は止むなく放すこととし証拠品として「チューシ」だけ持つようにいわれ「チューシ」だけはふところに持った。

歩けないので腕の力ではいずるより方法がない。第四匍匐(肘でハイズリ進む)で長いことかかり、第六中隊

と歩兵砲の陣地を通ったが誰もいない。砲二門がヒックリかえっていた。やっと第七中隊の陣地にたどりついた。ここも戦車五台に包囲され身動きできない状態だった。

敵は肉弾攻撃を警戒して近寄らない。とくに夜間は戦車は集結し、インド兵がぐるりと警戒している。我が方の爆薬攻撃がおそろしいからだ。

第五中隊二十数人は今井大尉指揮のもとに脱出、重患は担送、歩行困難者ははげまされながら歩いた。第一〇七野戦病院に収容されることになり各隊の負傷者が牛車二十六台に乗せられたが、途中で死ぬ者が多かった。野戦病院はジャングルのなかで、小さな赤十字の旗だけが病院であることを示し、名ばかりの病院でもある。手当は一切なし、死体の始末にぼうさつされていて治療を受けた覚えはなかった。衛生兵がうすい粥を飯ごうのふたにタラタラとたらしめてくれただけだった。「助けてくれエー」の声と、ウメキ声もいつしかたえて、病院は屍体処理場と化していた。とても患者のめんどろをみるひまもなさそうだ。

戦車がくるから歩ける者は今のうちに逃げると病院の話だ。そのうちに私の傷も、若い体力のせいか少し快方に向かい、肉も盛りあがってきたので野戦病院を出てカンドーのけわしい山越えにいどんだ。関根、山本と三人で戦車にみつからぬように用心しながら進んだ。途中新発田の隊でみたことはあるが名前はわからない軍曹が一人で、あしをやられたので両膝をついてひっしに歩いているのに追い着いた。ヨチヨチ歩きだからもう限界にきていた。お互いにはげまし、いたわりながら後退するうちに偶然にも友軍が山中に隠した糧秣貯蔵所を発見した時は嬉しかったなあ。

軍袴（ズボン）を抜いで先の方をしばらく袋状にして左足に米、右足に小豆をギッシリいれ靴下にも入れた。さっそく米をたき久ぶりに満腹感にひたった。軍曹にも分けてやったらヒゲづらにポロポロ涙を流して喜んでくれた。

軍曹の傷の状態から同行は無理とわかり、無事を祈って別れたが恐らくあのままになつたらうと思うと胸が痛む。南をめざして後退するのだが自分をたよりに生き抜

くしかない。

皆がバラバラになって、ヨロヨロと気力だけで山のなかを四か月もさまよい、モールメン目指して歩き続けた。その間に生活の知恵が自然と身につき、牛の殺しかたも上手になったよ。銃で撃てば戦車に知られるからごぼう剣でのどをさくがなかなか死なない。つぎに腹をさいて心臓、肝臓を取り出し食った。肉は食べきれず、そのうちウジがわいたので残念ながら捨てざるをえなかった。

マッチは切れたので服をちぎって火縄を作り、竹をこまかくさいて火だねにした。傷口の膿はウジが食べてくれたのか肉も盛りあがり傷口をふさいでいた。泰緬国境を越えるときは日本のつくった鉄道に乗ったが、国境では墓標がピッシリとすき間なく建てられていた。また谷底には無数の車両が底を見せてひっくり返っていて、激戦のあとをしのばせた。

メコン河のミトで五中隊に復帰、渡河中に一班が空襲にあいやられた。私は二班だったので助かった。

ラングーンの肢趾体育訓練所に入れられ、午前は肝

臓、午後は牛乳の給与で体力回復に努めた。

終戦は八月十七日に知った。「負けた！ 逃げるか！」が頭に浮かんだ。仏印で軍旗を焼いた。連隊はフランス軍の管轄下にはいったが、武装解除はただちに行われず、負けた日本軍が勝ったフランス軍を逆に護衛するという奇妙な現象がみられた。それは安南人の反乱ベトナム軍が独立を目指して仏軍を攻撃してきたからだった。日本兵も安南軍に参加した者が相当あったようで、武装解除は敗戦から一か月後だった。

サンジャックの収容所は柵もなく自由なものだった。暮舎生活で専ら野菜づくりにはげみ、帰国の目当てもなく「キンヌキ」強制労働の噂が飛びかい、逃げる兵も出て、歩哨がいなくなるのは日常事だった。

二十一年五月四日仏印のサンジャック港で故郷なじみの「弥彦丸」に乗ったが、港内はマストだけ出した沈戦で一杯だった。乗船時に英と仏の検査があったが、英軍は紳士的だった。スズキの姓の者は乗船をことわれ残された。多分戦犯容疑者の名が鈴木だったのでだろうか可哀想でならなかった。

一週間の航海だったが、果たして日本に帰れるのかと心配だったが、鹿兒島に着いて、やっと安心した。上陸して支給された軍服が内地にいた兵隊が復員の時に残していった古服だったのが皆の怒りを買ひ、ポロ服を海中に投げ捨ててウツプンを晴らした。  
突然帰ったので家族は泣いて喜んでくれた。

## 仏に救われたビルマ撤退記

愛媛県 山本 義男

### 〔軍歴〕

昭和十七年一月十日 教育召集三か月で丸亀西部第三八部隊師団通信隊入隊。陸軍二等兵、無線通信手として教育を受く。

昭和十七年四月十日 教育召集解除。同日付臨時召集同隊入隊。無線隊一期検閲は七か月で、その間、送受信、暗号作業等を修得のかたわら歩兵教育を受ける。

昭和十七年七月三十日 陸軍一等兵、師団司令部防衛室勤務。乗馬係勤務。将校当番その他の任務に従事。

昭和十八年十一月二十日 陸軍上等兵。同時にビルマ派遣軍楯八四二部隊に転属。同日坂出港出港。

十一月二十五日宇品港出航、敵艦のさまたげに防戦のすべなく十二月三日呉湊に退避。

昭和十八年十二月六日 呉湊出航。

昭和十九年三月十六日 航行中コレラの疑いで香港陸軍病院に入院。

香港陸軍病院で伝染病として隔離されたが、検査の結果、飲料水にこんにゅうした毒物による胃の炎症で、急性胃腸炎であった。症状は食物をうけつけず、下痢嘔吐がつづき脱水症状となり死にいたるといわれたが、さいわい運がよかった。

入院した病棟の婦長さんが隣村出身の毛利ヤスミ日赤病院の婦長（準士官待遇）さんで、特別に留意していただき、おかげでいのち拾いしたと感謝している。現在も宇和島で元気に暮らしておられます。

昭和十九年五月十五日 香港陸軍病院退院。同日香港